

夏季福音特別集会 第1回集会

「全き自由」——ヨハネ伝第8章31～36節

2003年8月15日（御殿場YMCA東山荘）

大自然の如き人間 本当の自由 復活のキリスト 素直にスーツといく 律法の不自由 福音の自由 死からの自由 神への自由 キリストというのは凄いや キリストは素晴らしいね！十字架による門戸開放 罪を根こそぎ背負う 自由の御霊 キリストと一つに

●大自然の如き人間

皆さん、こんばんは。私が特別集会に関して覚えているのは、ある兄弟が熱を出して、行けないと言う。私は、その頃は非常に素直にキリストの癒しということを信じておりました。小池先生が常々、

「身体の調子がわるかったら、そのまま来たら治ってしまおうよ」

とおっしゃるものですから、私はそれを本気でそう思っていましたので、

「担いで行くから、一緒に行こうよ」

と、その前夜に言った。直前になって

「熱を出して、行かない」

と言うから、

「そんなことあり？ 熱がどうしたの？ 行けば治ってしまうよ」

と言って連れて行った。そしたら、向こうにいる間に熱が下がったそうです。

私は、なにも「ねばならない」ということではなくて、「その通りだ」と信じ込んでいたんですよ。だから、

「熱がありますから、何々ですから」

と言って集会を休んだりなさるのは、私にとっては不思議でしょうがない。もちろん、絶対安静の病気の方には、それはすすめます。そういうことはよろしくありませんから、これはやっぱり医学に従ってください。けれども、日頃、私たちが接している方で、「風邪をひいた」だの、「熱がでた」だの、そんなものは一過性のものです。そういう場合だったら、本当に万難を排して出てくれば、治ってしまいます。

私の場合は、風邪をひいて熱をだしたら、走ります。汗をかいて、大抵それで良くなるのが八割です。悪くなることも、たまにはあります。それでも、そんなことが理由で勤めを休んだとかいうのは一度もありません。

キリストというお方に本当にゆだねていきますと、やせ我慢でも何でもありません。それが自分の日常になってしまうんです。そういうことです。我々の集まりは何か変な人間の



集まりだと思わないでください。

人間には多面的なものがある。非常に冷静で理性的な面と、非常に情熱的な面と、いろんなものがあって、本当の人間なんです。大自然がそうでしょ。小池先生がよく、

「大自然の如き人間になるんだよ」

と言われた。それはつまり、自由自在ということなんです。何かに規定されて、

「こうでなくてはいけない。この型にはまれ」

というの是不自由なんです。今日のテーマは「全き自由」でしょ。本当の自由ということは全き自由ということ、完全な自由です。私は、人間が最もほしがっているものはこれではないかと思う。

「いや、自由なんてレベルが高すぎる。私は今日のパンがほしいんだ」

と言う。なぜ、パンがほしいんですか。パンを食べないと死ぬからでしょ。死というものに対する恐れがある。パンを欲しがらしめる。いや、そんなことはない。本能的にパンが欲しいですよ。けれども、やっぱり、パンが全てではなくて、パン以上のものがあるよということ、キリストは我々に教えてくださった。四十日四十夜、断食して、サタンと闘つて。

「お前は神の子ならば、この石ころをパンに変えてみる」

と。イスラエルの方の石ころというのは軽石のようなものですから、非常に玄米パンみたいに似ている。だから、似て非なるものという、全くその通りです。うっかり食べようものならば、歯が欠けてしまう。食べられない。そういう石をパンに変えてみると言ったときにキリストは、

「人が生きるのはパンのみによるにあらず、神の御口から出る一つ一つの言ことば

によって生きる」

と。神の御言みことばには神の生命が宿っている。御言を本当に食べるということは、神の生命を食らうということなんです。神の生命を食らいますと、肉体はやせ衰えていても、内的な生命力でもって死なない。そういうことをおっしゃってくださいました。パンよりも大事なもののなんです。そういうことを教えてくださった。

●本当の自由

我々は日常生活で、

「これがなければどうにもならない。こうならなければどうにもならない」

という、「どうにもならない」というものの中に、凄く我々は日常生活の中で閉じ込められているんです。残念ながら、この生物体としての人間は。

「そういう生物体としての人間に、本当の自由というのはちょっとレベルが高すぎて、もつと低次元のレベルで豊かに生物として生かしてくれたら、それで十分で



はないか」

と、マルクスの信奉者たちは戦後日本が乏しいときに、そう言いました。

「先ず、パンを与えよ。そんな自由や永遠の生命なんていうものはるか彼方のこととで、先ず身の回りが豊かになれば、争いもなくなるし、みんなが愛しあうことができる。だから、社会体制を変え、政治体制を変え、パンの豊かな社会をつくらう。天国をこの地上に実現しよう」

と。これが戦後、日本を風靡ふうびした思想だったんです。私なんか、そうかも知らんと思っていました。けれども、それから50年たつても、そういう社会はどこにも実現しませんでした。かえって、そういう思想の持ち主たちの国は貧富の差がひどくて、しかも、一握りの権力をもっている人たちが贅沢ぜいたくざんまい三昧の生活をして、人民が飢えていても知らぬ顔というのが現実ですね。

私が西ドイツに留学しましたが、ちょうどベルリン封鎖があつた1961年8月29日だった。8月13日にベルリンが封鎖されて、あわや東西の激突という時でした。西ドイツへ行つて、そこには東から逃げてきた学生たちがいる。日本の状況をいろいろ話しますと、不思議がりました。ちょうど、安保闘争が激しかった頃です。

「日本は平和なんだね。呑気ゆづりなんだね。自分たちのように激しい現実にはぶつかつている人間には、そんな悠長ゆうちやうなことを言っているゆとりはないんだ」

と。東から逃げてきた人たちはたえず、喫茶店に入つても、どこかに聞き耳を立てているものがないか、密告されやしないかと、たえずキョロキョロ、ドキドキしている。それが習い性になつてしまつて、大学に来て、時々そういう恰好をするそうなんです。その兄弟は、全家族で東ドイツにいたけれども、家族バラバラで逃げて来た。そんなことも聞きました。

本当の自由というものを人間は求めて、あるときは革命を起こしたり、いろんなことをやっただけでも、地上には少しも実現しませんでした。今も実現しているとは言いがたい。しかしながら、それにもかかわらず、キリストが、神さまが私たちに約束してくださっている、与えようとしてくださっているのは、本当の自由なんです。

先取りして言いますと、ここに書きましたように、ルカ伝の言葉の、

「**懼るな小さき群よ、汝らに御国を賜うことは汝らの父の御意なり**」（ルカ12・

31）

と。「父」はキリストの父でした。けれども、そのキリストが「父よ、父よ」と呼んで——ちやうど赤ちゃんがお母さんに抱かれているように——「父よ」と言つて、その懐の中にいつも安らつておられた。だから、「私の父」とおっしゃるのはごく自然なんです。ところが、「私の父」という言葉でなくて、「汝らの父、あなた方の父」、そのお方の御意はあなた方に御国を賜うことだと。



では、御国とはどんなところだろうか。まず、ここでは死というものの恐怖がありません。死の恐怖がない。病気ありません。みんな、ニコニコしてますよ。本当に愛が満ち満ち溢れているところなんです。もつと言いますならば、父あるいはキリストと同じ質の方々に満ち溢れているところなんです。そういう同質の者たちだけがそこにいます。個性はみんな違いますよ。個性はみな違いますけれども、本当に愛と光に輝いた、生命に溢れた霊たち。

そして、その霊たちもちゃんと朽ちぬ身体をいただいているんです。その朽ちぬ身体を顕してくださったのは、キリストのご復活というあの姿です。福音書に描かれています。戸を閉じていても、スーツとキリストは現れてきた。そして、弟子たちの前でお魚を食べられたという。幽霊かと思つたら、

「ちゃんと、骨もあるよ、身体があるんだよ」と言われた。

その前に山上で変貌されたことがありました。真っ白な姿に輝いて、天界からモーセとエリヤが降ってきて、イエスさまがどのように十字架にお架かりになるか、その姿、プロセスについて語り合っていたと書いてある。ペテロとヨハネとヤコブだけがそこに居合わせた。あまりにも神々しい光景に彼らはまったく肝をつぶした。そして、ペテロはうわごとのように、

「ここに居るのは素晴らしいことです。ここに三つの小屋をつくりましょう。」

一つはあなたのために。一つはモーセのために。一つはエリヤのために」と。しばらくすると、雲が全体を覆って、モーセたちは天に帰っていった。目をあげてみると、イエスさまだけがそこにいらつしやつた。そういう光景が福音書に描かれています。ああいう光景を見ますと、本当に凄いと思います。

●復活のキリスト

それをその通り実証してくださいましたのが復活のキリストの姿です。復活のキリストの姿というのは誰にでも見えたものではありません。本当にイエスを慕う方々、イエスに会いたいと思う方々に現れてくださったんです。弟子たちが集まっていたときに、一人だけ抜けてたのがいました。トマスという弟子です。イエスの御姿が見えなくなつてから、トマスはその場にやつて来て、他の弟子たちは得意気に

「イエスさまに会った」

と言った。そうすると、トマスは

「そんなものは信ずるものか。その脇腹に手を差し入れ、手の釘跡に指を差し

入れてみないと、俺は絶対に信じないよ」

と言い張つた。それからちょうど一週間後に、イエスがもう一度現れた。

「トマスよ、さあ、指を入れてごらん。脇腹に触つてごらん」



と、キリストの方からそう言った。もう、トマスはその場に平伏ひれふしましたよ。自分がつぶやいたことが全部つづぬけですから。それで、

「さあ、触つてごらん。あなたは見たから、信じたのだね。見ないで信する者は幸なんだよ」

と言われた。決して、トマスを責められなかった。人間として当たり前なんです。見ないで信するなんて、人間にできることではない。だから、とがめられない。けれども、

「それは真実なんだよ、本当なんだ、私は本ものなんだ。本ものに出会うということとは幸せだ。だから、これからは、見ないでも信じるんだね」

とおっしゃった。

だから、私たちがこういう特別集会をいたしますのは、我々の修養のためではない。そういう素晴らしいキリストにここに下りてきていただいて、ここに

「さあ、触つてごらん」

と、一人びとりにそう語りかけていたいただきたいから。

「求めよ、そうすれば与えられる」

とありますね。キリストを求めます、私たちは。

「いや、今はお金の方が欲しいんです」

とおっしゃる方もあるでしょうけれども。人がどんなに苦労しても得られないもの、人があるに努力しても得られないもの、それをキリストは無代価で与えようとしておられる。それがキリストの御意なんです。天の父の御意なんです。御意なんですから、仕方がないんです。「私がどう思う」ではない。御意は、神さまの御意はこれだよと。これが福音書に書かれています。

だから、福音書を読まないで、神さまはいるとかいないとか、キリストがどうかこうだと議論するのは大いに間違っている。やっぱり、神さまの御国のことを、神さまご自身どんなお方なのか、キリストはどういうお方なのか、何を語ろうとしておられるのか、ということはこの新約聖書、とりわけ福音書に先ずぶつかることです。ぶつかったときに、またこれは躓きがあります。

「こんなものは信じられるものか」

と。さっきの「眩い姿に変わられた」と言うと、

「誰も見てないではないか。ペテロとヨハネとヤコブの三人だけだ。あいつらは嘘

をついでいるかも知れないではないか」

と。イエスが湖の上を歩いてこられた。「そんな馬鹿なことがあるものか」と。何千人もの人が癒されたとか。五千人の人が五つのパンと二匹の魚でお腹いっぱいになっていたとか。しかも、パン屑を集めたら十二籠に満ち溢れたとか。

「そんな馬鹿なことがあるものか」



と。それで、離れてしまうんですね。私は申し上げたい、

『そんな馬鹿なこと』と言うあなたはそれほど賢いの？ あなたは天国に行つて見てきたの？ キリストに出会つてきたの？」

と。誰も天に昇つた人はいない。誰もキリストに出会つた人はいない。たまたま、臨死体験でキリストに出会つたという人はいる。それはいるんですけども、本当に生きたままでキリストに出会つた人はめつたにいない。「めつたに」と申しますのは、たとえばインドのサンダーシンググという方は祈りの中でキリストに出会つていられるんです。まれに、そういう人があります。これはもの凄い使命をおびた方です。けれども、他の人たちは、まずはキリストに生きたまま出会ふことはない。けれども、さっきのトマスに対するキリストのお言葉のように、私たちが本当に幼子になつて、キリストの御言に、聖書の言葉に自分をおぼえていけば、向こうの方でいくらでも注ぎこんでくださるんです。

キリストへの入門テストは、素直になつて、幼子の心になつて、「はいっ」と言つて、そこへ入つていくか、

「いやいや、そんなものは信じられるものか。俺の今までの経験からして」

と言つて、そこへ入つていられないか、のどちらかです。何年経験したの？ たつた百年ですか。神さまは永遠なんですからね。

そういうことで、人間というものは賢いようで、実はあまり賢くはない。賢いと思つている人ほど、神の国には遠い。これは実に聖書も言つてます。

「愚かなる者を、無力なる者をあえて選び給えり」

と書いてある。だから、非常に公平にできている。貧しき者、力無き者、そういう者をあえて選び給えり。それは、賢き者や力ある者や、そういった己の方で誇るものを持っている、そういう者たちにギャフンと言わせるために、神さまはそういう幼子たちを選んでくださったという。

●素直にスーツといく

聖書に入門する、キリスト入門は素直にスーツといくことです。つまり、今までの自分の知識とか経験とか、そういうものはさておいて——御国のことが語られるから、我々の三次元の世界ではないから——この世の世界では、物理学博士、理学博士、数学博士、哲学博士、いろんな人が褒めたたえられていいです、この世に関するものは。けれども、神さまの御国に関するものは、その者たちの今までの努力も全く通用しない。もし、通用するのなら、その人たちは素晴らしい天国人になつて輝いているのに、哲学者なんていつもしんどそうな顔しているでしょ。気の毒なくらいに、しんどそうですね。私は哲学の方とお話したんですよ。

「先生みたいに、素直に信じたいんだけど、哲学は信じさせてくれない。苦し



いんだよ」
「何で、そんなに苦しいのに、それにしがみつくの？」
と言いたい。その人はその道では本当に素晴らしい方ですけれども、その住んでいる世界が違うんです。

我々のこの三次元といいますが、私たちの——さつき、生物体と言いました——この宇宙、天体、すべてそうです。人間が理性的に学問的に追究しようとしている世界。今やもう宇宙まで行ってますものね。宇宙船で火星まで行こうとか。それは全部、神さまの御手の中にあるわけですよ。しかも、それを全部窮めたから、神さまはいたか。「いなかったよ」なんて。そうでしょ。けれども、どこにでもいらっしやるんです、次元が違うから。私たちの中にスーツと来てくださる。詩篇の中にありますね。宇宙の極にまで行って——やけくそになってですよ——

「もう、やけくそになって宇宙の極にまで行ってみたところ、そこに神さまがちゃんと待っていてくれる。どこへ逃げたって、そこに神さまがいた。もうしようがない、参りました」

という。それほど神さまは素晴らしいということです。詩篇139篇にあります。あれは旧約聖書で素晴らしいところですよ。そして、

「私が母の胎内で行くられる時、まだ本当にかけるもなかった時から、神さまは私のことをご存知だった。それくらい凄いな。何と神さまを讃えたいらいでしようか」

という、讃えの讃美の歌になっています。

私たちは神さまの世界を、何か非常に遠いところの別世界と思うでしょうけれども、実はさにあらず。ちやうど今、空気がこの部屋に充満していますね。よく、小池先生はおっしゃった。

「この空気はこの部屋の空気だけれども、窓を開けてごらん。天界と通じているんだよ。宇宙と通じている空気がみんな支配して、おおっている。皆さんは意志せずして空気を吸っている。空気を吸わないで生きている人は手を挙げてごらん」と。誰も手を挙げられない。

私たちは空気を吸うということ意識するのは、水中へ行つたときですよ。潜って行ったりしたら、呼吸困難でもう上がりたいといって、上にあがりますね。それ以外は、地上にいるときは、ほとんど空気のごとくは自覚しないでおりますけれども、空気は我々の身体に浸透して、私たちを生かして、たえず新たにしている。

実は、神さまの霊気、キリストの霊気というものは、そうやって私たちの中に浸透したくてたまらないんです。ところが、私たちはそれを妨げている。なぜですか。神さまの霊というものは聖き霊なんです。神さまは聖なるお方ですよ。聖き霊なるお方と、我々みたい



な——生れながらの我々です——生れながらの我々はエゴイズムで、己中心で、傲慢なる者、霊が傲慢なんです。霊が傲慢なうえにいろいろな知識が付きますから、これは核兵器を造ったり、悪いことにはいくらでも悪知恵がはたらくわけです。そして、同盟軍をつくって、それはもうヘタすると、地球がその人たちの手に落ちたら、えらいことですよ。

不思議と、善良な人はそういうことはやらないですもの。善良な人はそれぞれ地の塩として隅にいますけれども、結託して何かでかいことをやろうなんていうことはあまり考えない。

我々の霊というのは本来的に——生まれた時はそうでなかったはずなんですけれども、神さまが人をお造りになった時は、そうではなかったはずですけども——いつのまにか、人間というのは傲慢な、己中心の、神さまに敵対するような霊になってしまいました。そういう、自己中心な霊、霊的存在です。神さまも霊的存在です。どっちも霊的存在なんです。物質ではない。動物たちもみな霊的存在ですよ、そう私は思っています。動物たちも霊的存在ですけども、その中で際立って凄い靈感をもっている。靈感を持っているということは、本当は神さまという霊的存在と交わりたい。交流したいんですよ。交流したら、本当に生命が流れてくるから。本当のものが流れてくる。それが切れているから、苦しいんです。それを自覚している。それが行き詰まりになる。窒息するんです。

● 律法の不自由

そういう、本来、愛であり、生命であり、永遠者でありたもう、その霊なるお方がご自分の霊を我々に注ぎ込み、生命を注ぎ込み、私たちを神さまと同じような自由な存在として活かしたくて活かしたくてしょうがないのに、人間はちつとも、その神さまのさそいに乗ってくれなかった。

いろいろな宗教をつくりだしましたよ、人間は。「つくりだした」と言ったら悪いけれども。世の中にありますね。私は、その中に旧約宗教も入っていると思います。これは神さまから来たんです。モーセを通して来た。けれども、受けそこなった。そして、モーセを通してやってきた律法によって人間は自由になれたか。とんでもない。もっと不自由になっちゃった。そういう不自由から解放しようと思って、キリストは来てくださったけれども、そのキリストを殺してしまいますからね。

キリストを殺したユダヤ教の人たちの流れに大賛成していたのがパウロです。そして、キリストの弟子たちを迫害しまくっていた。しかし、ダマスコのクリスチャンたちを捕まえようと思ってエルサレム本山からちゃんと添書をもらって、息をはずませてダマスコへ向かう途中にキリストがパーツと現れて、パウロはぶつ倒された。ああいうドラマをやっ

てほしいですね。パーツと光が現れて、パウロはボタンと倒れた。

「あなたはどなたですか？」



「私はお前が迫害するイエスである。刺ある筈を蹴るのは大変なことだよ」

と言われた。その時、パウロはものが言えなくなつて、目が見えなくなりました。回りの者は何か大きな音が響いたということは知っているのだけれども、パウロに何が語りかけられているかは何も知らなかったという。パウロは目が見えなくなりましたから、手を引かれながら宿へ行つた。パウロにとつては大変なショックですよ。三日間、食べられなかった。水くらは飲んだでしようけれども、食事ものを通らない。ものが言えない。目が見えない。そういう状態で三日を過ごした。そうしたら、アナニヤというダマスコにいる素晴らしいクリスチャンにキリストから言葉が臨んで、

「パウロ（後のパウロのこと）は今祈っている。アナニヤよ、お前がパウロの所に行つて、手を置いて祈つてやつてほしい」

と。そうしたら、アナニヤは

「とんでもありません。あのパウロというのは酷いやつですよ。迫害の急先鋒です。片っ端からひっ捕らえては、エルサレムへ引き立てて行つて、あれは悪い大変なやつです。あんなのに私は手出しはできません」

と言つたら、

「いやいや、パウロは今、祈っている。ダマスコへ来る途すがら、私はパウロに出会つてパウロをひっくり返してやつた。そして、アナニヤよ、あなたがパウロの所へ行くということもちゃんとパウロに知らせてあるから、お前は行つてやつてくれ」

と。そして、アナニヤがパウロの所へ行きまして、

「パウロ、パウロ。お前の途すがら現れ給うたイエスがお前を解放しようとしていらつしやる。イエスが行けとおつしやつたから、私はやつて来た。サウ

ロよ、目が見えるように。罪から解放されるように」

と言つて、パウロに手を置いて祈つた。そしたら、目から鱗うろこのようなものが落ちた。そして、パウロは目が開けた。食事をとり元気づいて、別人のごとくになったということが使徒行伝に出てきます。

そういうドラマチックなものなんです、福音というものは。我々のこの現実世界の中でおさまるようなものではない。非常にその枠をはみでています。はみでていますから、時には非常に不思議な現象になつてみたりして、人は躓つまずく。自分たちもそういう現象に出会いたいか、自分たちもそういう現象を起こしてみたいとか。これはどこまでも神さま主体の事態です。キリスト主体。神さまが主役なんです。我々は受け手です。我々のできることは、

「主よ、あなたが私を本当に捕まえて、あなたの器としてください」

と。そのために、一人ひとり捕まえ——パウロほどの、あんな荒療治はありませんけれ



ども——もつと優しく、その人その人にふさわしくその人を、時には一瞬にして、時には長い時間をかけて、本当にその人らしく一人ひとりを懇ろに導いて、本当に御国の民にしてくださる。「御国の民」というのはキリストのような人格、キリストのような素晴らしい霊的人格。それに造り変えてくださる。それには我々自身が改造されないといけません。

といいますのは、私たちはエゴの塊、罪の塊。神さまは聖なるお方。聖なるお方の前に我々罪びとは立てないというのは、これは相場が決まっているんです。これはモーセの時からそうです。だから、旧約聖書を見てごらん下さい。モーセがああ十誡の律法をいただきにシナイの山に登って行つたときに、雷鳴が轟いて、酷い恐い状況だったんです。つまり、罪深き人間が聖なる神の前に出るといふことは、本来できない相談だった。それを、

「モーセよ、いらつしやい」

とお招きがあつたから、モーセは行つた。それでも、雷鳴轟く恐ろしい光景だったということがへブル書にもちゃんと出てます。

それから、「神を見た者は必ず死ぬ」といわれていた。神と目と目が向かい合つたら、必ず死ぬ。焼き滅ぼされてしまう。高压電流に触れるようなもんです。ぶつ飛びますよ。だから、旧約の神さまは恐ろしい姿で描かれています。民数紀略を読みましても、神さまの言いつけに背いて、姦淫したり何かした者は

「二晩で二万三千人殺された」

と書いてます。そのくらいに厳かな聖なる神だったわけです。そういう方の前には、預言者といえども、びくびくでしか近づけなかつた。でも、預言者は神さまから選ばれてますから、

「私はお前を選んだ」

と言われる。イザヤという預言者でもそうです。炭火のようなものがサツと唇に触れると、

「お前は聖くなつた。だから、私の言を語れ」

と。預言者たちは呼ばれた時、みな逃げ回ります。

「私はその器ではありません。困ります」

と逃げ回りますけれども、

「いや、逃がしはせんぞ」

と、神さまが捕まえて、御言を与え、力を与え、しゃべらされる。しゃべりますと、それはどうしても——民はひねくれていますから、背いてますから——それに対して審きの言葉になつてしまうわけです。そうすると、民は喜ばないわけです。そしてまた、預言者に食つてかかる。気の弱い優しいエレミヤなんていうのは、もうそれで本当に神さまと民との間の板挟みで、今でいうノイローゼですよ。胃潰瘍もいところだと思えますよ。もうズタズタ。自分自身を神さまに呪うくらいにね。もう語りたくない。黙っていたらお腹の中が苦しくなつて、語らざるを得ない。語ると、みんなが食つてかかつてくるという。そう



というのが旧約の歴史です。

●福音の自由

そして、最後に現れてこられたのがイエス・キリストというお方です。だから、旧約の歴史というのは苦しい歴史なんです。神さまの方は正しい道へと導こうとしておられるんだけど、人間はなかなかそれにうまく乗ってこない。どうしても、自我というやつが神の律法をゆがめてしまう。それで、律法中心の宗教になってしまった。それがキリストが現れた時代は宗教だった。だから、その律法に対してキリストは真つ向から勝負していかれたというか、

「本当の律法というのは人を活かすものだ。人を活かすために与えられた神の律法が人を殺し、人を苦しめるものになっていく」と言っている。パウロは同じことをローマ書、ガラテヤ書で言っている。パウロはそうやって、キリストにひっくり返されるまでは、律法のじゆんぽう遵法者、

「律法の義につきては責むべきところなし」という道徳的チャンピオン、神の前のチャンピオンだと自負していた。それがキリストにぶつかって、目から鱗が落ちて、

「ああ、間違っていた」

ということ、今度は、律法によっていかに人間が不自由に生きていたかということに気がつく。だから、パウロのローマ書とかガラテヤ書をお読みになると、

「律法自身が呪いだ。こういう律法の呪いからキリストは我々を解放してく

だされた」

と書いてあるんです。まるで、律法自身が罪深いように書いてある。律法というものは聖なるもので、律法には何の罪もない。何が悪いかという、我々の中に巣くっている罪というやつだと。この罪からどうやって逃れることができるのか。自分自身はまだ罪の身体だ。内面の自分としては神を喜んでいい。しかし、もう一人の自分がうちにいて、それに逆らう。分裂してしまう。肉の弱さというものは、死に至るまで自分につきまとう。キリストは私を新しくしてくださったのにもかかわらず、まだ旧いものがチクチク、チクチク、自分をつつ突いてくる。

「ああ、我悩める人なるかな」

という嘆きをもっている。これがいわば道徳的に神さまの前に立とうとする人間にとっての苦しみです。

日本人はあまり、律法ということを自覚してこなかったためだと思う。だから、日本人がローマ書やガラテヤ書を、こういつたパウロ書簡を読みますと、



「なんで、こんなに律法のことをこれほどまでに言うんだろうか？」

と、ピンとこないと思うんですね。「律法の義」とかいうことが書いてあっても、ピンとこない。クリスチャンになったら、ピンときますけれども。というのは、クリスチャンになると、逆に良心が鋭敏になります。そして、神を知らなかったときは平気でやってたいろんなこと、あるいは内面的な思い、これが神に反するんだということをもの凄く敏感に感ずるんです。そうすると、やり切れなくなつてね、クリスチャンになつてから、この「律法の義」というものに苦しむんです。私はそういう経験をしました。やがて、そこから解放される。そこから解放されないと、とてもじゃない、死んでしまいます。だから、パウロさんたちみたいに、もう生まれながらにしてユダヤ教の中で育つて、律法と格闘してくる人たちと、我々東洋人のように始めはそういうものではなくて、せいぜい自分の良心といった、自分の道徳観でせいぜい神の前にと思っている者と、それらがクリスを信じているわけですよ。

きつかけは、他のことで結構なんですよ、きつかけは。とにかく、病から解放されたい。死の恐怖から救われたい。もう私という人間が嫌になった。こういう自分から解放されたい。いろいろあるんですよ、自分に。それを解放されたい。クリストのところに来たら、解放されると思つて、クリスト信者になつた。今までの過去は全部洗い流して、

「お前はクリストを信じて、新しくなつたんだよ。うれしいですね」

と言つて、新しくなれるんですよ。ところが、聖書を読んでいると、だんだん良心が鋭敏になつてきて、

「クリスチャンになつたんだから、もう少しクリスチャンらしく立派な人間でなくてはいけない。人々の模範でなくてはいけない」

と、そういう思いが出てくる。クリスト教国だったらいいですよ、そんなことは言わなかった。なんせ、日本では少数の選ばれた者でしょ。甲子園に出場する選手みたいなものですよ。だから、

「あなた方はみんなから見られている。あなた方はクリストから遣わされた選手です。それで変なことをしたら、クリストの名が廃るんです」

「はいっ、わかりました。宣誓します」

なんて、やりますけれども、実はそれがもの凄い重荷で、それでまた二度目に死にました。私は。一度死んでクリストに救われて、そして、律法が私の中に入ってきて、二度目に死んだ。そこから生き返つてからはもう死にはしません。そういう経路をたどつた。けれども、日本人や東洋人には、律法ということからちよつと遠い。

●死からの自由

さあ、皆さん、本当に自由ですか？ あるいは、



「もしこれがなかったら、もつと自由なのに」

「私にとつて今これが不自由なんや」

「この問題がひっかかっているんや」

とか、そんなのが全くないという人がありますか？ 人間的レベルで考えて、

「まったく自分は何一つ不足はない。すべて思いのままだ」

というのは、まずはないですよ。

というのはまず、人間は必ず死にます。どんなにきばつても死にます。だから、結婚式で「死」なんていうことは言いたくない。「四」という部屋もつくりたくない。人間は知らず知らずのうちに、死というものをいみ嫌う。お葬式の後、家に帰ってきたら、「忌」という字が書いてある。忌み嫌うという字がバーンと玄関に貼られている。汚れた家ですよ、近づいてはいけませんよと。そういうのを皆さんは経験ありませんか。そして、清めの塩がおいである。そのくらい、死というものは忌み嫌われているわけですね、日本では。それから、

「いや、どうせ死ぬんだから」

と言つても、やつぱり死というものは、死は明るいと云う人はまずいない。死の先は何？

「うむ、暗いね。まつ暗闇だね。閻魔えんまさんがおるかもしれんね」

と。暗いイメージがつきまとうのではありませんか、死というものに。

「いや、輝いています」

と言うのは、クリスチャンです。輝いているのは御国ですね。これが輝いているんです。けれども、キリストがいらつしやらないとしたら、つまり、太陽が照つていないとしたら、まつ暗闇でしょ。

闇というのは何かというと、太陽のない世界です。積極的に闇があるのではないと思うんです、私は。太陽が照つておれば、闇はないわけでしょ。太陽が没すれば、闇なんでしょ。闇という実在はないように思うんだけど、本当に太陽がなければ、闇が真実であつて、太陽はにせものみたいに思つてしまいますよね、我々は。そのくらいに、太陽という明るい世界をあこがれはしても、もしも、キリストというそのお方がいらつしやらなかつたら、私たちの行き先は死であり、陰府の国であり、暗い所であり、恐ろしい所なんです。だから、死への恐怖というのが、凄く我々を苦しめる。

病い、死に至る病い、癌。昔だったら、肺結核もそうでした。その他さまざまのものがありません。そういつた死に至る病いというものにとりつかれますと、その時に本当に人間は初めて真剣に人生を考えるのかもしれない。余名いくばくもない。その間に自分は何かするか。過去、何をしてきただろうか。これからどうするんだろうかと。「あと一年」と言われた人の人生は、人によつてはもの凄く輝くという。今までは、のんびんだらりとやってきた。しかし、

「あと一年」



と言われてみて、一日一日が黄金の日々であると言うんです。そして、一年がたった。どうもない。「どうして？」と、お医者のところに行ったら、

「あれは誤診でした」

と。その途端に色あせたと言うんですよ。今までの緊張、輝き、それがスーツと消えてね、また元のもくあみになって、

「どうしてあんなに輝いていたんだろうな？」

という。これは実話なんですよ。

私たちがキリストに在って新しくされて生きるというのは、そういう輝く日々が、一日一日が神さまのもとから送られてくる。永遠の一日として送られてきて、しかも、

「今日限りだよ。明日はまた明日だよ」

と。一日一日、

「ひじと日毎の糧かてを与えたまえ」

と祈りながら、一日一日を天からいただいたいて、そして感謝して生きていく。それが齢を重ねてみたら、百歳になっていたということかもしれないね。だから、輝いているんです。一日一日が輝いている。ただただ、「明日もまた今日の如くならん」という、だからだからだから流れていく人生というものは、あまりにも平凡である。あまりにも緊張感も目標もなく、しかも自己中心でありますと、これはもう絶対に人間にとつて生き甲斐というものではない。それは生き地獄と言います。なぜかという、身体は弱ってくるんです。身体が弱ってきて、したいこともできないのに、死なせてもらえないと言つて、不自由を言っている人がいっぱいいますよ、世の中に。これは生き地獄です。

本当の生命というのは、生きていく限り、神さまから肉体的な力もいただき、知恵もいただき、活力もいただき、他人に奉仕する。他人に仕えることによつて、自分が生き生きしてくる。これはやっておられる方の姿を見てたら、わかります。本当に人のために己を忘れて尽くしている人たち。やりすぎたら、疲れてやっぱりに死にますよ。これは、やりすぎはダメです、人間ですから。人間ですから、やりすぎはダメですけれども、それが適度に人のために我を忘れて働いている方の姿というのは光っています。

● 神への自由

これは宗教が何だという問題ではないんです。神さまは偏り見られない。本当の生き方をしている人は祝福を受けるし、偽りの生き方をしている者は、レッテル・クリスチャンも全部ダメです。そんなものは全然、通用しません。だから、絶対に宗教で人を差別しないでください。とかく、クリスチャンは、

「あなたはキリスト者ですか、それではよろしい。あなたは仏教ですか。あ、ダメです」



とか。こういうふうな、宗教で区別するのは絶対にいけません。

キリスト教だって、ゆがんだキリスト教がいっぱいある。「ゆがんだ」というのは、御意から見たら違うよというキリスト教がいっぱいある。では、どうやって見分けるの？と。まず、己を何者ともしてない。神さまが、キリストが全てだ。キリストが全てを為したもう。善なる方はキリスト、それから父なる神のみと。己ではありません。善なる方はキリスト、父なる神のみ。それは全部上から降ってくる。これを人間の側はいただくのみなんです。人間は本来、無財産なんです、何もありません。何も無いのに、あるかのごとくに錯覚して、それを自分の手柄であるように思い込んで、そして自分が偉くなったと思う。そして、人を見下します。それが一番いけない。キリストの姿を見てください。本当に神さまの前にぶつぶぶおられます。「父よ」とおっしゃるとき、キリストは空っぽなんです。

「あなたの御意を。私ではありません」

と。「あなたの意を50%、私の意を50%」なんて、そんなことはどこにも福音書に書いてない。キリストは死に至るまで、十字架の死に至るまで御意のみを求め、それに自分を献げきつていかれた。しかも、その献げきつていかれた行き先は何かというと、ストレートに天国ではなかった。「地獄へ往け」と言われた。これが御意だったんだから、大変ですよ。

「父の御意は御国を我々に賜う」

とある。しかし、我々はすぐに往けない。そうすると、往く道を神さまはつくらないといけない。ところが、神さまに往く道には大きな妨げがあつて、

「自我ある者は入るべからず。罪ある者は入るべからず。エゴイストは入るべからず。これこれした者は入るべからず」

と、「べからず」の条がたくさんあつて、誰も入れないですよ。第一、神さまだけを愛してきた人はありますか。誰もありません。人を愛して愛しぬいた人はありますか。誰もありませんね。

「いや、90%は愛したつもりですけども、やっぱり10%は私に残しておきました」と。つまり、人間というのは、「全」ということができない。部分なら、ある程度はやるんです。10%は自分のために、90%は人のため、神さまのためにと。そういうことはやるんですけども、全というのはできない。ただ、この「全」ということは——誤解のないように申し上げますけれども——これは質的なものであり、量的なものではありません。量的なものではありませんならば、どうしたって人間は自分のために食事もとらなければいけません。自分のために睡眠時間も必要です。休息も必要です。キリストだって、休息もなさったです。けれども、キリストの気持ち、意識、それはいつも神さま、神さまオンリーなんです。しかも、「神さまの御意は」と聞いたたら、「人に尽くせ」と。神さまは満ち足りておられますから、神さまに尽くすということは何かというところ、

「貧しい人を助けてやれ、苦しんでいる人を助けてやれ、罪なる人を赦してやれ」



という、神さまの愛の御思いを全部、キリストにお預けになった。霊なる神さまは直接に人間どもに現れて、「こうだよ」と言ったって、通じないんです。やっぱり、人となつてくださったキリスト、イエスさまを通して、手を置き、言葉を語り、一緒に生活していく。そういうふうにして、キリストは本当に休む暇もないくらいに——「食する暇もうち忘れて」という讚美歌121番がありますように——そのようにして、キリストは人に尽くされた。だから、キリストにおいては、神を愛するという人と人を愛することは本来に一つでした。でも、我々はなかなかそうはいかないですよ。量的にいけないで、量的なこととはともかく、質的に、私たちはどうしても自己を求めてしまいます。自己中心ということ。これを聖書は「罪」と言ってます。

●キリストというのは凄いや

それから更に、

「不自由なものは何かあるか？」

と考えたら、皆さん、やっぱり生活していかねばなりませんよね。大人になっている人は、家族をどうやって養うか。自分の会社がつぶれそう。自営業の方は、景気が悪くてつぶれそう。どうしようかとか。仕入れの問題から、売上が落ちてくる問題から、いろんなものが我々をおっかけてます。それから、若い方々は、自分はどういう職業につきうか。高等学校、中学校の方は、自分はどういう学校を選ぼうか。ものごころがついたときから、自分はどうなるか、どうしたらいいんだろうかという、そういう先々のことで、子どもさんもちろんですけれども、それ以上に親がやつきになっている。

また、この親の被害をだいたい子どもさんが受けてます。親はどーんと構えてたらいいに、親の方が、

「あんたが自分で心配しないから、お母ちゃんが代わりに心配しているのに」と、余計な心配をしている。そういうことが非常に日本の国はすみずみまでいきわたっている。

クリスチャンでもそうなんです。私は、「クリスチャンは、どうしたの?」と言いたい。

「あなた方は、キリストに全托すると口では言ってますが、やっていることは何なの?」

と聞きたいんですよ、本当のところ。

「必要なものはすべてご存知である。先ず神の国とその義を求めなさい」

と。「義」というのはキリストです。先ず、神さまの御国、キリストご自身を求めて、夢中になりなさいと。キリストに夢中になって、その中で

「実は、娘のことで私は今、問題をかかえていますので、どうぞ、いい道を開いてくだされ」



と。先ず、キリストのところへ祈り込むことなんです。それを忘れて、「いやいや、この世的なことはこの世的に解決しなければならぬ」

なんて、それがこの世の賢い人の在り方です。「それにやらねば」と言ったら、まるで分裂なんです。口では「キリスト、キリスト」と言い、やっていることはこの世的な原理で動いている。これはやっぱダメですね、徹底しないと。「全的」というのは徹底することです、内面的に。

どんな職業についていいかわからないというなら、やっぱり、祈ることなんです。本当に祈ることなんです。キリストはすべてをご存知でいてくださるんですよ。しかも、一人ひとりについてのキリストなんです。本当にこれは不思議ですよ、一人ひとりにキリストはペタツとくつついて離れないんです。それは御意なんですよ。

「キリストは自由を得させんために解き放ち給えり」

と。我々を苦しめているあらゆる束縛から、死の恐怖、病の恐怖から、就職の心配から、何を勉強してよいかわからない心配から解き放した。自分の論文はどうやって書いたらよいかわからん心配から、学校の中がひっくり返っているそれをどうしたらいいのか。自分にはいろんな仕事もきてもう引き裂かれそうだといいことから、すべて、自分の身の回りで起こっている事柄をことごとく、主は知りたもう。ことごとくなんです。

私は、「キリスト道」と言うかな、キリストと一緒に生きるということとは「宗教」にしたくない。現実なんです、これは。宗教と言いたくない。皆さん、空気は現実でしょ。おいしいお水は現実でしょ。おいしいお食事も現実でしょ。キリストというお方も、そのようにキリストの霊気をもつて我々を養い、霊の食物で養い、そして知恵をくださり、何よりも一番私たちのことをよくご存知で心配してくださっている、おもんばか慮 ってくださいっている方なんです。成年後見制度というのもありますけれども、キリストは本当に私たちの死に至るまでの保護者ですよ。助け主。聖霊は助け主です。審き主ではありませんから。助け主です。

私たちは弱いんです。弱くていい。立派でないんです。クリスチャンの一番の誤りは、

「立派になりたい、強くなりたい、賢くなりたい、人の助けを得たくない」

という——もちろん、人の助けにすがりたくないでしょうけれども——何か「自分を立派に立派に、自分を自分を」という、自分が段々段々、偉人になっていく、そういう道を追い求める——私がさつき代表選手だと言いましたが——そうではないんです。クリスチャンというのは、いよいよキリストの幼子になっていく。幼子が、赤ちゃんがお母さんにピツタリくつついているように、歳を重ねれば重ねるほど、経験を積み積むほど、

「やっぱり、キリストというのは凄いや」

と。これなんですよ、「キリストというのは凄いや」と。経験しないとダメですよ。

N君はさつき台風の体験をお話しになりましたね。あれは私はよく覚えています。私は



あの頃、若王子山へ毎朝祈りに行っていました。丸太町通りを、聖書と讃美歌を片手に持って山へ祈りに行くんです。その時に、N君は9月に西ドイツに旅立つ時に台風が来そうかどうか、というので、

「主さま、台風をぶっ飛ばしてください」

と本気で祈っていた。それで、

「N君、祈っているから、大丈夫。台風は来ないから」

と。そういうことを本気で祈り、本気で信ずるバカがいたので、台風は来なくなった。本当なんですよ。

●キリストは素晴らしいね！

ですから、キリストというお方は、本当に生活のすみずみにまで浸透してくださるお方なんです。キリストというお方は、こちらが本気で幼子の如く信じていけばいくほど、向こうから応えてくださるお方なんです。キリストの方からモーシオンをかけておられるのに、こっちが知らん顔していることほど悲しいことはないですね。キリストが100で臨んでくださるのに、10だけ信じておきましようなんていうのでは悲しいですよ。ご馳走でもくださったときに、

「いや、ちよつとお気持ちだけいただきます」

と、ちよつと食べてサツと返したら、一生懸命に一晚がかりでつくったおもてなしをなさろうという方は悲しいでしょうね。全部きれいに平らげて、「おいしかったわ」と言われたら、報われるでしょうね。それと一緒に、キリストは我々に本当に日々に必要なものを「ご存知で、我々に必要なものをちゃんと用意してください。しかも、さりげなくなんです。決して、恩着せがましく、こうだよということを見せつけるようなことはなさらない。後から思ったら、ああそうだったなあという。この味をしめると、将来のことに心配しなくなります。将来のことに心配するということは、ひとつはキリストに対する裏切りです、キリストを信じてないんだから。信用してないんだから。これは裏切りでしょ。それから、自分自身にとってバカバカしいんですよ、余計なことをしているから。無駄を省いていきましょう。能率よくいきましよう。

さぼっていいというのではないですよ。自分としては精いっぱいのことをやります。知恵を尽くして、自分としては精いっぱいのことをやります。しかし、これが自分の精いっぱい、これ以上はどうにもなりません。でも、もうあとはあなたです。主さま、あなたはちゃんとご存知だから、いいようになさってくださいますよねと。

私なんかでも、今年の夏が一番きつい夏ですね。いろんなことがふつてきて。特別集会の準備も、去年はかなりできたんです、今年はほとんどできなかった。昨日一日です。昨日一日でこれを全部、プログラムから全部、考えてつくって用意して、讃美歌も、昨日一



日それをやりました。

9月には、ドイツで講演しなければならぬ。頼まれているんです。今、日本で法律の司法改革をやっていますね。それから、法律家の養成課程も変わっていかうとしています。そういう日本の情況について、ケルン大学で話をしてほしいと頼まれましたね。他の方に回すよりも、自分が引き受けた方がいいだろうと思って、あれは5月頃でしたか、6月頃でしたか、お引き受けしたんですけれども。なかなか準備ができないし、もう1か月を切っています。相棒になつてくださるドイツ人の留学生をみつめました。その方は既に法律家の資格をとっている方で、京都産業大学に留学してきておられる方で、その方を紹介していただいた。その方に21日にお会いすることになっていらっしゃるんですけれども。2回目です。初め紹介していただいた時は8月の初めでした。次にお会いするまでにいくらかでも作って、そして見てもらおうねと約束したのに、何もできてない。今朝、京都駅でお詫びの手紙だけポストに入れてきた。今、法科大学院というのがありますね、あれのための準備が大変なんです。それから、何か他にもいろいろありますよ、次から次へと。どう考えても、これのために一日、これのために一日というくらいにしかさけないように、もうきているんですけれども。

でも、私は集会是最優先ですよ。これはキリストの集会ですもの。私は人間的な準備はできなくても、私は本気でこの集会に臨み、本気で主さまにお願いすれば、主は最善をなしてください。これはもうちゃんと信じています。だから、何も心配しない。

それで、さきほどのドイツ人の助けも、これはいつも私が手伝ってもらう方が、夏休みで本国へ帰られるんです。だから、今年はとても絶望的だなと思った。それから、秋に日本へ来る私のドイツ人の友人がいる。それが今回早く来たんです。7月の初めに来た。

「今年は台風が来るのが早い」

と書いてきた。彼はいつも私に「台風が行くよ」と。私がいろんなお世話をするものからです。早く来てしまった。これも使いものにならない。それから、頼りにする方が本国へ帰られた。これはいよいよどうにもならんと思つて、その本国へ帰られる女性の、産業大学の教授をなさっている方に、

「実は、こういうことで困っているので、方が一、あなたが日本におられるなら、

手伝ってほしい」

と言つたら、そしたら、産業大学に留学生として来ているその法律家の方を紹介してくれた。これは、父の御意であると思ひました。もちろん、そういう方の助けを得ないと、ドイツ語ができませんからね。

そういうこともありました。その他、本当に不思議と、パッと道が開けることがある。これは不思議ですよ。皆さんも、是非、行き詰まる人ほどその味をしめてください。悠々とかまえている人には、キリストは助けをくださりません。余裕のある人には、キリスト



は助けてくださいませんか。乏しい者、時間がなくて困っている者、能力がなくて困っている者、お金がなくて困っている者——私は今はお金はかなりあるんですけども（笑）、お金はかなりあるようになったんですけども。これも全部、天からきました——とにかく、体力が乏しくて困っている人、何でもいいんですよ。本当にキリストに在って、キリストのものとされてからは、どしどし願っていかれたらいい。これはもう、エゴイズムの願いではなくなるから。と言いますのは、私たちはそれまでは自分の立身出世とか、自分の栄達とか、自分が金儲けして楽な生活をしたとか、あるいは家族にいい目をさせたいとか——これは自分の延長ですから——そういう、「自分、自分、自分」ということでやったら、

「俺はやったぜ」

と、誇りなんです。

「あいつはなんだ、だらしが無い。やってないじゃないか」

と、審きなんです。そういうことが我々です。これは神さまが最も嫌われるんです。何を喜びたもうか。すべては神さまに栄光を帰するということ。栄光は天に。私は空っぽです。あなたの恵みでこうやって素晴らしい体験をさせていただきました。ありがとうございまして。地上にありながら、なんだか神さまを味わったような気がします。素晴らしいです。「いやあ、人生とは素晴らしいですね」と。

「いやあ、キリストは素晴らしいね」

ということを、皆さんは百回は言わなアカンですよ、死ぬまでに。百回では足りないかもしれない。千回とか。記録してください。そのくらい、本当にキリストは素晴らしいお方なんです。自分が、素晴らしいと思つたら、今度は人にも言いたくなりますよね。

「あなたは浮かぬ顔しているけれども、キリストというのは凄いのよ。それから、

言うとかけど、金はいらんよ、一銭もいらんからね」

と（笑）、これを先ず言わないといけません。金を集める宗教は多いですよ。

●十字架による「門」開放

それから、律法をいろいろもってくる宗教も多い。パウロもこれで苦しんだ。パウロの書簡で「律法からの解放」ということをどれだけ言っているか。

「キリストは自由を得させんために我らを解き放し給えり」

と。二度と奴隷の轡に繋がれるなど。その「奴隷の轡」というのは「律法」だったんです。その律法の中のまたひとつのシンボルとして、「割礼」というのがある。ユダヤ人は必ず割礼を受けなければならぬ。パウロは断乎、それに反対した。

「割礼を受けたら、だからクリスチャンだ、だから神の子だと。割礼を受けてなければ、神の子ではない」



という、何か割礼というひとつの儀式——これは男性の生殖器にメスを入れるというシンボルですけれども——それが何ものかになってしまつて、キリストご自身でなくなつてしまふんですね。だから、パウロは一切の外的なものを排した。律法を一切排して、

「ただキリストのみ」

と言つた。パウロは「信仰のみ」と言いましたが、あれは誤解を招くんです。「信仰のみ」という言葉は非常に躓きになりますよ。「信仰」なんて、我々にはありませんのです。

「いやあ、キリストは凄いな」

と、これが信仰といえは信仰です。キリストの凄さを味わうということなんです。キリストは凄い。この方が凄く我々の中に入りこんでいる。素晴らしいことをやっていってください。それだけだよということです。我々の側には何も無い。信仰なんか、そんなものは邪魔になるよ。キリストは凄いと。キリストに遠慮なく入っていただく。門戸開放、それだけなんです、我々は。

ところが、さつきから申しますように、門戸開放がなかなか我々ではできなかったんです。自我とか、罪だとか、穢^{けが}れだとか、心配ごととか、いろんなものがあつてね。神の前に固く閉ざされていた。それをぶちこわしてくださったのが十字架なんです。

「なんで、十字架がそんなにありがたいの？」

と。私たちが神に逆らうという罪、咎、過去のマイナスを、キリストは、

「全部、それを私は十字架で引き受けるから、お前はもう心配するな」

「では、過去だけですか」

「ちがう、ちがう。将来も。過去も将来も。のみならず、お前自身をだ」

と。これが大事なんです。過去にどうした、これからどうするという、そういうものではなくて、

「汝自身を完全に贖つた」

ということですよ。

「贖い」という言葉は、例えば日本だったら昔、遊廓に身売りされるでしょ。遊廓に売られたら、その女の人を取り戻すのにお金を出さないとイケないわけです。もちろん、女性は何百両かで売られるわけです。そこへたくさん利息だとか、いろんなものが付くわけです。昭和になつてもそうだったんですね。そして、いろいろな稼ぎは全部、お前の衣装代だよ、お前の何々代だよといつて、全然、取り戻そうと思つても、利息だ何だというものが全部消えたことにして、解放してくれない。一生、奴隷的な、性的奴隷になる。それを取り戻すというのは、全財産を投げ出すか、というぐらい大変なことなんです。

それを、何億という人間どもをそういう不自由から解放つというのは大変な、生命を賭けてキリストは我々を贖い出してくださいとくださったというのが「贖い」です。罪からの解放、贖罪。これは十字架に架からなくていい方が、十字架に架かってくださっているという、こ



の厳かな事実です。これはユダヤ人は受けとれなかったんです。ユダヤ人は受けとれなかった。これは自力の宗教ですから、律法を守って、そして神さまのところへ到達しようという、自己完成していく宗教ですから。その間違いにパウロは気付いたわけです。

仏教の道だつて、いろいろありますね。本当に仏の本願だけにすぎるといふ道と、それから、自力じりきで修行していくという道と。禅というのは、これは自力でも他力たりにきでもないです。己が無になつてしまふという、そういう修行ですから。行を積むわけではないですから。禅の方に聞きましたら、やはり自力禅と他力禅というのがあるそうです。

私が鈴鹿の国際大学で親しくしていた先生は、アメリカ文学の先生ですつと若いときから禅をなさつてきた方で、小池先生の本をととても喜ばれて、そして、

「いつしか、私は小池先生、奥田先生のお導きによつて、自力禅から他力禅に変わつてきたように思います」

と言われた。今度の第6巻（キリスト告白録『心安かれ』）も差し上げたんですけれども、私の序文を読んで、とても喜ばれた。そういうことなんです。

仏教にもいろんな道があります。禅は、自己からの脱却です。己からの解放。自分が無になる。これを坐禅、あるいは禅の修行をとおして、体得する道なんでしょう。しかし、これは誰にもできる道ではないし、瞬間的にはそうなつても、それが永續するという保証もありませんし。これは大変だと思ひます。それから、「千日行」なんていう、比叡山の「千日回峰」なんて、これは大変な修行らしい。こんなものは普通の人間にできるわけがない。それから、ユダヤのように、律法を守つて、律法を寸分ズレなく守つていこうとする。パウロがそうでした。

「律法の義につきては責むべきところなし」

と言つたけれども、彼には愛の心がなかった。ステパノの、あの自分を石打ちにするユダヤ人たちを、

「父よ、彼らを赦してやってください」

とステパノは祈りました。

「視よ、天が開けて、キリストが父の横に立っておられるのが見える」

と言つて、ステパノの顔は輝いていた。「父よ、彼らを赦したまえ」と。自分を石打ちにしますから、

「どうぞ、この罪を彼らに負わせないでください。わが霊を御手に委ねます」

と言つて、息を引き取つたと書いてある。ステパノはユダヤの人たちにずっと歴史を説きおこして、

「あなた方は預言者たちに逆らい、常に聖霊に逆らつてきた」

と、そういうことを言つたものですから、彼らはもの凄く怒りに満ちて殺到して、石打ちにした。そのまん前に坐つていたのがパウロだった。パウロはそれに賛成していた。自分



の衣を差し出したと、そういうことが使徒行伝に出てきますから。

●罪を根こそぎ背負う

律法を守って神に到達しよう、神の前に「立派だよ」と言ってもらえるような人間になろうとする道は、立派に見えながら、実は本当に神さまの御意に逆らっていたということにパウロは目覚めたわけです。その厳しさ、苦しさはパウロ書簡を読まないで、さつきから申してますように、日本人にはピンとこないかもしれないけれども、パウロはそれを叫んだ。

「キリストは自由を得させんために我らを解き放ち給えり」

と。二度と奴隷の軛に繋がれてはならない。奴隷の軛とは律法であり、律法は私たちが虜とりこにして、ついに殺してしまうという。本来、自由を得させ、生命を与えるべき律法が、聖なる律法が、どうしてそんなことになったのか。それはつきつめれば、我々の中に巣くっている「罪」というやつだ。その罪を根こそぎ十字架で背負ってくださったのが、キリストの十字架だと。キリストは十字架で——本来私たち自身が神の審判に服すときには十字架刑で、そのぐらい私たちは神に逆らい続けてきたのに——それをご自分が、聖なるお方が、神の独子キリストが、今まで神さまにノーと言って逆らったことのないお方が、この十字架をしつかり受けとって、そして敢然と十字架に架かってくださった。

「お前たちが十字架につけるのではない。私は自分が進んで十字架につくんだ」

とおっしゃった。そして、十字架の上で、

「父よ、彼らを赦してやってください。どうぞ、この罪を彼らに負わせな

ください」

と言われた。その十字架にパウロは撃たれましたから、もうパウロにとっては、十字架され給うたキリスト、これしかない。ここから生命は流れてくる。ここに本当の赦しがあり、本当の解き放ちがあり——単なる解放ではないです——そこから聖霊という生命の霊が流れてくる。これが素晴らしいんです。

解放というのはまだ二分の一です。我々を解き放った。解き放された私たちはどこへ向かうの？ 何をやるの？ どんな生命に生きるの？ その中身は聖霊という生命です。それはキリストの分身なんです。キリストの御霊、キリストがくださる霊。肉体のキリストはキリストというお身体をとっておられるから、我々の中に入れなかった。けれども、復活されたキリスト、霊のキリストは、我々の中に自由自在に入ってきてくださる。そして、「入りたい」とおっしゃってください。向こうの願いなんです。我々の願いでもありますよ。けれども、キリストの願い。これを本願といいます。キリストの願いは我々の願いをぶっ飛ばすくらい強いんです。私たちの願いは今も強くて、明日はどうなっているかしのれない。

「もう、いいですよ。もう、疲れましたから、いいですよ」



と言つても、向こうは

「いや、いや、そうはいかんよ。捕まえたら離しはしない」

と。しつこいですよ、キリストというお方は。捕まえたら離されない。もう本当に離されない。ありがたいんですよ。

●自由の御霊

だから、自分の信仰が強い弱い、あるのなないと、そんなことはナンセンスです。キリストが凄い。この自由の御霊というのが入ってきてくださいますと、本当にさわやかです。それから、あらゆる思い煩いから解放されます。

というの、道徳とか、教えというのは毎日毎日「そうだよ、そうだよ」と言い聞かせないとダメなんです。言い聞かせて、頭ではわかっていても、お腹の中で「ふーん」とはなかなか言わない。「思い煩うな」と言われても、「やっぱり、思い煩いますよ」と。それが人間でしょ。「憎むな」と言われても、「憎みたいですよ、あんなやつは」とか。だから、ここにたえずズレがある。ところが、キリストというお方が入ってこられると、そんなのはどうでもよくなるんです。どうせ、こつちにはできっこないですよと。こつちにできっこないから、落第坊主だから、でき損ないだから、殊勝な考えは三日と続かないから、だから、キリストは我々の中に突入してきたわけです。

「私がお前の主人公だよ。いいんだね」と言われる。

「はいっ、もういいんですよ。やけくそですよ」

と。それはやつぱり、二回目を経験しないといかん。初めは、解放されてうれしい。

私も自分の病気のこととか、死のこと、運命のこと、いろんなことが心配でしょ。

「キリストに委ねたら、すべてから解放されて、キリストが全部してくださるから、

大丈夫だよ、奥田君」

と、I君が言ってくれた。それは1956年ですよ。それでも喜んでクリスチャンになった。教会生活を始めた。フィンランドやスウェーデンの宣教師の導きも受けた。受けているうちに、律法の世界へだんだん導かれてしまったんです。宣教師さんの方がわかるかたのか、私かわるかったのか、それは知りません。キリスト教の本があつちこつちに氾濫して、それを読むと、律法のことがいっぱい書いてある。

「クリスチャンはこうでなければならぬ、ああでなければならぬ」

と。それがどんどん自分の中へ占領してきますと、これはもう不自由で不自由で、私は本当にキリスト教はやめようかと思つた。坐禅でも組みにいこうかと、仏教の方へ行こうかなあと。それくらい悩んだ。それは留学したドイツ時代にも続きましたね、始めの若い頃まで。だから、クリスチャンになつても、あと数年間は本当に「第二の死」というやつを



味わわないと、本当の解放にこないというのが私の体験でした。

体験は、皆さん、ちがいますから、絶対化する必要はないけれども、私の場合は、始めは死の恐怖とかいろんな思い煩いとか、外的内的な煩いからの解放だった。それで、ものすごく喜んだ。そして、現にもものすごく元気になった。病気なんかどこかへふっ飛んだ。そして、非常に前向きに積極的に進んで行きました。それから、だんだん、内を見るようになって、そしてだんだん、自由がなくなっていく。まだダメだ、まだダメだと。そういうことで、本当に苦しかった。

その時に、第二の解放がやってきて、本当に十字架というのが私のためだと。

「十字架は誰のためでもない、お前のためだ」

と。誰が何と言おうと、他のクリスチャンが

「あいつは模範的なクリスチャンでない。あいつの信仰生活はまちがっている。教会生活は誤っている」

とか、何を言おうと言わしておけ、勝つてにせいと。私はキリストと本当に個人的に一对一でそこで一つになった。これを引き裂くやつはいないんだ。審きたかったら審きやがれ、このバカたれがと、こういう本当の開き直りです。

人ではない。律法ではない。本ではない。キリストと私。この絶対関係。この中に介入することは許さないぞと。これが来たんですよ。これがありがたい。これが来ますと、もう学問がどうなるうが——家族がどうなるうがと言ったら、申し訳ないけれども——家族も、その他のことは全部、キリストが吸収してしまった。

「お前の煩うことではない。道徳問題、それはお前の煩うことではない。学問するかしないか、お前の煩うことではない。学問する必要がなくて、伝道者になるなら、ちゃんと時は示す。学問の道を行くなら、行きなさい」

と。その頃、学者の道を歩んでましたから。「私から指令がいくまでは、今の道を安心して歩きなさい。しかし、囚われるのではないよ」

と。キリストがすべてであつて、キリストのくださった自由は絶対に失ってはならない。「学者がクリスチャンになれば、いい知恵が出てくる。だから、クリスチャンになります。商売人がキリストを信じたら儲かるから、信じましょう」なんて、そんなことではない。

キリストがすべてです。キリストに従って歩んでいけば、そこでおのずと自分の為すべきことが示されてくる。その道がキリストの栄光となる。だから、人に認められようが、そうでなかるうが、そんなことはどうでもいい。だから、価値標準がガラツと変わったんです。この世の尺度では通用しない。それが本当の自由ではないでしょうか。



●キリストと一つに

それから、心配事はいろいろやつぱりきますよね。でも、私が心配する以上に、キリストはちゃんと引き受けてくださっている。「孫が病気になった」と言ったら、ちゃんといお医者さんを用意してくださるし、「子どもがこうなった」と言ったら、ちゃんと道を開いてくださるし。たとえ、子どもが死んでしまおうと、それは私のせいではないです。キリストが悪いんですもの。キリストが責任者ですもの。キリストが責任者なんです。自分のことも。自分の運命環境のことも。これから先々のことも、身の回りの人のことも、集会のことも、全部、キリストが責任をとり給う。私は無責任。そのかわり、私はキリストに委ねるといふ、それだけです。これは約束したんですもの。契りちぎを結んだんです。この最も単純な、「キリストと一つ」といふ、この道を開いてくださったのが十字架ですから。この十字架は本当にありがたいですよ。そこから本当の自由は来ます。「自由」なんていうのは、そんな一晩で語れるものではありませんけれども。

先ず、生活の思い煩いからの解き放ち。生命のこと、死のこと。そんなことはもう完全に解決済み。何を食べようか、何を飲もうか。家族のことも全部、キリストが引き受けてくださる。それから、内面的な道徳的な問題も全部、引き受けてくださっている。過去・現在・未来、全部片づいている。

クリスチャンだつて病気になるですよ。それではクリスチャンは病人なのか。ちがいます。病気という現象が起こっているだけで、クリスチャンは本来もうキリストに在つて完全に永遠の生命を与えられて健やかなんですよ。小池先生はおっしゃいました。

「蒲鉾かまぼこみたいなベットにはりつけになつた人も健やかなんですよ。キリストにおいて、十字架でその病は全部片付けられている。もう生命は死から贖い出されて、永遠の生命をいただいている。そういうものが来ている。現象面で何であろうと、現象にとらわれてはダメだよ」

「現象的に病気が残つていようが、悪しき思いがどんどん湧きあがろうが、性欲が沸き上がろうが、何が起ころうが、そんなことは現象面は放つておけ。キリストは本質的にあなたを完全に解放し、あなたに本当に自由を与えた。キリストの生命が宿っている。あとのことは全部、責任をもつ」

と、キリストが言つておられるんです。だから、信者が間違いを犯すのは——現象面でも必ずピタリと来ないと、これは祈りが聞かれていないとか、自分は不信仰だとか——そんな現象や出来事で判断するのは、これはいけませんからね。我々は本質、キリストに祈つた。それでいいんです。あとはもう向こうに任せておけばいい。キリストに祈つた。

「祈りたることは必ず叶えられたと信ぜよ」

と。キリストに在つて祈るなら、すべて聞いてくださる。聞いてくださるといふけれども、



本まもんになるも、それ以上のことを思うことはないじゃないか。いつも、前半だけでいいんです。キリストに祈った。あとどうなるかは任しとけ、向こうに。

「何も起こっていないじゃないか」

「勝手や。キリストに、あんた、尋ねてください。俺の知ったことか」と。そうなんですよ。

「ああ、何も起こってない。俺の信仰はまだ足らん」

とか、そんなことは絶対に思わないで、凶太く、キリストに「はいっ」と信じました。

「ねえ、主さま」

「うむ」

と主さまは答えてくださる。生活のすみずみにキリストは浸透したくて浸透したくてしようがない。これは余りにも常識離れしてます。余りにも非常識ですから、キリストはいろんな形で、そして、福音書もパウロ書簡も、ヨハネの手紙を何もかも口を酸っぱくして、

「思い煩うな、何々するな」

と。なんで、それほど言わんらんかというのと、我々の肉なる存在はそれほどにこの世的な判断で神さまのことは見てしまうからなんです。けれども、神さまの方から見たら、この世の我々の判断は滑稽こっけいでしょうがない。

「お前たちと分離したら、それはしょうがない。お前たちは自分たちで独自の世界をつくって、責任をとっていかなければならない。でも、私が乗り込んだではないか」

いか。お前たちをこの世から脱出せしめたではないかと。身は一時この世にあらうとも、それは出向命令を受けて出張しているようなものです。国籍は天にある。天国人です。天国人がしばし、神さまのご命令によってこの地上に配属されているんです。なぜかという、地上を救うためです。地上の人たちを救うためです。私たちが救われて、パッと天国へ行ったら、この世の人たちは誰も救ってくれる人がないわけです。だから、私たちはここに残留して、残留組となって、この世の苦しんでいる人たちを助けなさいといけない。小池先生はもう兵役免除で向こうへ往ってしまった。92歳で往ってしまいました。

私たちはただ長生きして、ギネスブックに何かを書くとかいうのではなくて、キリストに在ってどんな凄いことが何回あったかという、それを書き記してギネスブックにするという、それくらい在意気込みで、皆さん、やってくださいね。そして、神さまはそれぞれの方を本当に愛しておられるから、それぞれの方を用いたくて仕方がないんですよ。

私たちの与えられた全き自由は、これは本当に生命に溢れ、力に溢れ、喜びをもって満たしてくださいような、そして、愛をもって満たしてくださいような、そういうお方が私たちの中に鎮座しますんです。あなた方一人びとりが宮です。お宮さんで、その中にピカッと光っているお方がキリストなんです。あなたではない。あなたの中にあるキリス



トがビカーツと光って、

「お前と私は一つだよ」

とおっしゃってくださるから、うれしいではないですか。

「お前と私は一つだよ。一つになりたいんだよ」

と。愛というものはそういうもんでしょ。一つになりたいんですよ、愛というのは。愛は一つになりたいんです。「神は愛なり」というのは

「お前と一つになりたいよ」

と。そして、ご自分のいいもので貫き満たして変貌させてしまう。だから、天国はみんなピカピカに輝いている人たちがばかりですよ。ピカピカに輝かないと、そこへ入れてもらえない。じゃあ、早くから輝いている方が先に早く行けていいではありませんか。

皆さん、死んだら、人間誰もが直ちに天国に往くと思ったら大間違い。それは大間違いですよ。それはちょっと虫がよすぎます。やつぱり、天国に相応しい魂の質にならないと往けません。それはそうでしょ。これが自然天然でしょ。まっ黒けの人間がまばゆいところへ行けると思う方がおかしい。それでは、どうしたらいいか。まあ、霊界で少し修行して、だんだん穢れを洗って――

「洗えるんですか？」

「それはやつぱり、イエスキスマにすぎらなければダメだよ」

なんて言って――徐々に徐々にその霊が清められていくと、ピカピカになります。私たちはもう今、キリストを地上でいただいたら、もうピッカピッカなんです。ピッカピッカなんですから、もうすぐにでも往けるんだけど、地上で使命がある。それだけの話ですのですね。

もう9時になってしまいました。もう終わらないといけません。また、明日も明後日もありますから。では、私が祈って、今晩は終わりといたします。

